



キャンパス散歩

理学系研究科附属植物園 小石川植物園周辺

邑田 仁

大学院理学系研究科 教授



植

物園は本郷キャンパスから徒歩二〇分で到達できる。今や緑の少なくなつてきた本郷キャンパスとは対照的に、十六ヘクタールの敷地内いっぱい緑をたたえた施設である。「附属」する主体の大学よりもはるかに歴史は古く、三百有余年前に設けられた小石川御薬園に遡る。吉宗の享保年間の図面を見ると現在の植物園の範囲と全くといってよほど一致していることに驚く。紆余曲折の歴史に耐え、それほど長い間頑なに緑を育み続けてきたのだ。そんな思いを胸に植物園を歩こう。

植物園は東南から西北に細長く、台地と低地の二段になっており、その間の斜面からは低地に連なって並ぶ大小の池に水が湧き出している。園路は南西の端にある正門から一周しており、入り口正面の急坂を登って台地を奥に進み、日本庭園に降りて低地を正門にもどることができる。

正門を入ると坂の登り口に背の高いメタセコイアがある。一九四五年になって中国四川省でわずかに生き残った株が発見されたいわゆる化石植物で、そこで得られた種子が導入され、植物園で育った日本で最も古い木である。

短い坂を上りきると左側に植物園本館①がある。本郷キャンパスの安田講堂と同じく、当時工学部教授であった内田祥三の設計による、塔のあるユニークな建物である。の中には押し葉標本約七〇万点、植物自然史関連の図書約二万冊があり、東アジアの植物の分類学的な研究に不可欠な資料として学内外の研究に広く利用されている。また、分子生物学的な手法を活用した現代的な植物多様性の研究も行われている。

本館から奥に向かつて数列の桜の古木が枝を広げる広場がある②。一九〇一年、植物園の初代園長を務めた松村任三博士がこの木からとった標本にもとづいてソメイヨシノに *Prunus yedoensis* という学名をつけて発表した「生きた証拠」で、東大植物園とともに約一三〇年を生き続ける日本最古のソメイヨシノである。周辺には園芸品種の桜や、フジ、コダチダリア③などもある。桜の広場の左手奥には御薬園時代に栽培されていた薬草の種類を展示する薬園保存園と、エングラーの分類体系に準拠して主に草本植物を配列した植物分類標本園がある。

本館から右に曲がると柴田記念館とシダ園に行き着くが、途中左手にメンデルブドウとニートンのリンゴがある。そこから園の奥に向かつて樹齢約百年のイロハモミジの並木④が続く。並木の右には大小の温室があり、主に研究の目的で熱帯植物が収集されている。その中には翡翠色の花房を垂らすヒスイカズラ⑤や、世界で最も大きな花（花序）として開花時に話題を呼んだシヨクダイオオコンニャク、小笠原諸



5



4



3



10



9



8



13



12

- ① 植物園本館
- ② ソメイヨシノ
- ③ コダチダリア
- ④ カエデ並木
- ⑤ ヒスイカズラ
- ⑥ 精子発見のイチヨウ
- ⑦ ツツジ園
- ⑧ ハンカチノキ
- ⑨ カリン林
- ⑩ 針葉樹林
- ⑪ 池畔の梅林
- ⑫ ハナショウブ田
- ⑬ 日本庭園に面した旧東京医学校本館

鳥の絶滅危惧植物などがある。温室はぎつしり詰まった熱帯植物と湿り気を帯びた暖かさが独特の雰囲気醸し出しており、東南アジアからの留学生からホームシックが癒される場所だと聞いたことがある。

カエデ並木の終わり近く右手に、幕府に納める菓草を乾燥するのに使われた石畳の一部が残されている。突き当たりには、植物学教室の助手平瀬作五郎が一八九六年に精子を発見した研究に用いられた精子発見のイチヨウ⑥がある。裸子植物からの精子の発見は西洋の科学を取り入れたばかりのわが国の植物学が世界に誇る研究成果であった。精子発見のイチヨウ（とおそらくはその近くにあるクスノキの大木）は江戸時代から園内に残っている数少ない樹木のひとつである。植物園が明治政府に移管されるに際し、多くの木は切り倒されて個人所有となったが、このイチヨウは大きすぎて期限内に伐採できなかったと伝えられている。ここから左にもどると、桜の広場の奥に、徳川幕府が設けた小石川養生所の井戸がある。付近には園内で行われた青木昆陽のサツマイモ試作を記念する甘藷試作跡の碑や、ツツジ園⑦、最近人気のあるハンカチノキ⑧がある。

精子発見のイチヨウの奥はボダイジュ並木とスズカケノキ、ユリノキの大木が並んでおり、西洋的な雰囲気濃い一角である。これらの大木は明治時代に導入された街路樹などをまず新宿御苑と小石川植物園で試験栽培した名残りという。その奥は常緑樹林となっており、トキワマンサクの大木、一七二七年植栽の記録のある中国原産の薬木サネブトナツメ、樹皮が美しいシマルスベリ並木などを見ながら進むとカリン林⑨に達する。カリンも中国原産の有名な薬木で、歴史の古いものであると推定される。

このあたりから針葉樹の間⑩を通り抜けて左手の日本庭園に降りる。周囲には梅林⑪やハナショウブ田⑫があり、本郷キャンパスから移築された旧東京医学校本館⑬が映える。この建物は東京大学総合研究博物館の分館として公開されており、ここで植物園をでて分館を訪れることもできる（逆戻りはできない）。しかしハンコキやラクウショウなどの湿性の植物が水際に立ち並び日陰がちの低地をたどって、思いをめぐらせながら正門にもどるのもまたよいかもしれない。